

持田 豊会員のご逝去を悼む

本学会の持田豊会員は、去る平成14年5月15日、最愛の奥様に見守られながら73年の生涯を終えられました。ここに謹んで哀悼の意をささげるものであります。

持田氏は、青函トンネルの建設をはじめ世界の海底トンネルの計画や設計施工に長年携わってこられ、世界的にも著名なトンネル技術者であることは万人の認めるところであります。同氏は、昭和29年京都大学理学部を卒業され、当時の日本国有鉄道に入社されました。当時国鉄がその技術的可能性について検討を開始していた青函トンネルの調査研究に、入社直後に配属された鉄道技術研究所員としてかかわることになったのが、同氏と海底トンネルとの長い付き合いの発端でありました。当時の海上での調査は、漁船によるドレッシングや海上ボーリング等、厳しい気象条件の下で行われたものでありますが、持田氏は人並みはずれた体力と気力でこれらを克服され、「津軽海峡西口付近海底地質図」の作成に大きな役割を果たされたのであります。この成果はトンネル建設の技術的可能性を検討する上で基本となったものであり、その後の青函トンネルプロジェクトの遂行に大きな推進力となりました。



昭和39年3月、日本鉄道建設公団の発足とともに青函トンネルの調査業務は国鉄から公団に引き継がれることとなりましたが、持田氏は躊躇することなく公団に移り、引き続き青函トンネルの業務に携わることとなりました。昭和45年、青森方調査坑の工事基地である竜飛鉄道建設所の所長として調査工事の直接指揮にあたられ、海底トンネル建設にとって不可欠な技術である、先進ボーリングや地盤注入の技術開発に心血を注がれました。この時の成果が昭和46年の本工事着手として結実することとなったのであります。

当時現地で同氏の指導を受けた私どもは、その知識の豊富さ、トンネル建設にかける情熱、とりわけ同氏の指導力には本当に圧倒されたものですが、一方で、大変な家族思いの愛妻家であることに少なからず驚いたものです。建設所のあった竜飛は工事現場以外何にもない寒風が吹きすさぶ僻地でしたが、持田所長は小さな女の子さん2人と奥様を連れて赴任されました。宿舎は私ども独身者がたむろする寮のすぐ隣にあり、酔っぱらった私ども部下がよく持田邸に押しかけ、奥様に変な迷惑をお掛けしたのですが、奥様ともどもいやな顔ひとつされず、いつもご家庭の暖かい雰囲気になじませていただきました。同氏の意外と知られていない側面に触れた想いで、強い感銘を受けたことがつい先日のように思い出されます。

持田氏は、昭和54年青函建設局局長となられ、文字どおり青函トンネル建設の最高責任者として工事の指揮を執られ、トンネルの完成に大きな役割を果たされました。

公団退職後も英仏海峡トンネルの上級技術顧問をはじめとして、世界の海底トンネルの計画・設計・施工に関与され、直近では、日韓トンネル研究会会長として活発な活動を続けてこられました。まさに、世界の海底トンネルの建設にその全身全霊を捧げられた人生であったと思います。それだけに、同氏が亡くなられたことは本当に残念であり、なかなか他人では埋め難い大きな損失であります。

最後になりますが、生前のご指導に対して心から御礼申し上げますとともに、そのご功績とお人柄を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(北川修三 基礎地盤コンサルタンツ㈱)